

〈資料の紹介と研究〉 カール・ラートゲン「日本人の世界観」

野 崎 敏 郎

〔抄 録〕

カール・ラートゲンは、1907年にハンブルク拓殖研究学院に招聘され、そのさい彼は、東アジア情勢にかんする詳細な講義を企てた。ところが、気管支炎に罹患したため、ハイデルベルクで入院生活を余儀なくされ、ようやくハンブルクにおける講義活動が可能になったとき、その講義案を大幅に圧縮せざるをえなかった。おそらくそのためもあって、彼は、1908年2月に、公衆を相手に「日本人の世界観」を語り、講義では十分展開できなかった精神文化論について、とりわけ資本主義化と伝統的精神文化との相剋の問題に焦点を当てて論述した。

キーワード ラートゲン、日本人論、伝統社会、資本主義化、呪力剥奪

講演「日本人の世界観」の成立事情とその射程

講演「日本人の世界観」について

ここに紹介するのは、カール・ラートゲン（1856-1921）が、1908年2月21日に総合福音普及協会（*allgemeiner evangelisch-protestantische Missionsverein*）に招かれておこなった講演「日本人の世界観（*Die Weltanschauung der Japaner*）」の記録である。この講演の速記は残っていないが、『ハンブルク情報』と『新ハンブルク新聞』に掲載された梗概から、その内容を知ることができる。しかし同一講演の記録でありながら、二つの記事に記されている内容にはかなりの異同がある。いずれも記者がまとめたものだから、その記者の嗜好によって取捨選択がおこなわれた結果である。二つの記事を併せ読むことによって、この講演の全貌を推しはかるのが賢明であろう。

ラートゲンの日本研究

カール・ラートゲンは、1882年に来日して東京大学文学部（1885年の改組後は東京大学法

政学部、1886年以後は帝国大学法科大学)の教壇に立ち、教育活動を遂行するかたわら、日本と東アジアの政治経済状況について詳細な調査研究をおこなった。1890年にドイツに帰国し、翌年浩瀚な『日本の国民経済と国家財政』を著した。彼はこの著作によって教授資格を取得し、ベルリン大学哲学部私講師、マールブルク大学哲学部員内准教授、同正教授、ハイデルベルク大学哲学部正教授を歴任した。

帰国後も、日本や東アジアにかんする資料の蒐集に努めていた彼は、日露戦争(1904~05年)を機として日本にたいする関心が高まってきた頃、日本にかんするいくつかの論述を公にするとともに、日本を題材とした啓蒙的公開講義活動もおこなっている。ハイデルベルク大学においては、1906年夏学期に、「日本人の文化(Die Kultur der Japaner)」と題した公開講義(毎週月曜日夕刻7~8時)をおこなっており(AVH 1906 SS: 21)、この講義は、おそらく翌年刊行された『日本人の国家と文化』(Rathgen 1907)の原型であろう。

たまたま筆者が購入した『日本人の国家と文化』の古書には、前所有者クルト・ミュラーが購入日(1907年9月23日)を記入している。したがって当然9月以前に刊行されており、この本は、1907年夏学期をもってハイデルベルクを去るラートゲンのハイデルベルクへの置き土産である。

ラートゲンのハンブルクへの転出

ラートゲンは、1907年にハンブルク学術財団によって招聘され、新たに開設されたハンブルク拓殖研究学院(Hamburgisches Kolonialinstitut und das allgemeine Vorlesungswesen)の経済学担当教授に任命される。

この学院にとって、経済学担当教授は非常に重要であり、担当者は、経済・財政のみならず外交にも精通していなくてはならず、商人のための職業教育講座の運営にも携わってもらう必要があった(Melle 1923-24 (I): 363)。こうした重責を担ってもらわなくてはならないので、人選は難航し、ラートゲン任命にいたるまでにかなりの紆余曲折があった。ヘルマン・シューマッハー(1868-1952)の招聘は不調に終わり、ハンブルク市長ヴェルナー・フォン・メッレは、結局、政策問題に明るい歴史学者エーリヒ・マルクス(1861-1938)とラートゲンにターゲットを絞っていった(ebd.: 404, 412)。

メッレにとって、ハイデルベルク大学はリクルート上重要なターゲットであった。1901年からこの大学で教鞭を執っているマルクスと、その前年から勤務しているラートゲンは、いずれもシュトラースブルクやベルリンで学び、その後バーデンの大学で実績を積んでいた。彼らをプロイセンに呼びもどすためには、ハイデルベルクを上回る待遇を提示しなくてはならず、それはハンブルク財界の資金調達力によって可能だった。メッレは同時に、ハイデルベルクでラートゲンと共同で国民経済学ゼミナールを運営しているエーベルハルト・ゴートハインをも誘っていた(ebd.: 412)。つまり、ハイデルベルクの二人の経済学者を両方とも引きぬこう

としたのである。しかし最終的にゴートハインは辞退し、マルクスとラートゲンがハンブルクに向かうことになる。

着任後、ラートゲンは、学院の人事にもかなりの影響力を発揮する。1908年秋に、イスラム研究者カール・ハインリヒ・ベッカーが招聘されており、このときラートゲンとベッカーとのあいだで書簡が交わされている。ベッカーは、ラートゲンの熱意に動かされてハンブルクへの就任を承諾するのである (361-6. I 5 Becker)。

また1909年には農学者マックス・フェスカ (1845-1917) が、1914年には日本語学・日本文化研究者カール・フローレンツ (1865-1939) が招聘されている (Melle, a.a.O.: 639, 329-332)。いずれもラートゲンの日本時代の知人である。とくにフェスカは、ラートゲンが『日本の国民経済と国家財政』を執筆しているときに助言を仰いだ相手であった⁽¹⁾。

ハンブルクにおける授業準備

ラートゲンは、1907年8月に、ハイデルベルク大学における最後の学期を終え、ハンブルク拓殖研究学院における新しい教育任務に向けて授業準備をすすめる。彼は、学院の教学担当者に宛てて、8月4日付で書簡を書き、暑さに参りながら、講義内容について精査している旨を伝えている。学院側からしめされた講義原案は「東アジアの経済状態 (Wirtschaftliche Zustände Ostasiens)」であったが、彼はこれを「東アジアにおける国家生活と経済生活 (Staats- und Wirtschaftsleben in Ostasien)」に変更し、表1のような講義案を提示している (361-6. II 338, 1)。

この講義は毎週水曜日夜8~9時におこなわれる予定とされている。学院は、社会人聴講者を念頭に置いて講義計画を立てており、そのためこうした夜間開講が中心であった。このほ

表1 東アジアにおける国家生活と経済生活 (1907/08年冬学期)

回	日付 (予定)	内容
1.	10月30日	極東の開発
2.	11月6日	国土と国民
3.	11月13日	国民性
4.	11月27日	国家：過去と現在
5.	12月4日	東アジアと西洋列強
6.	12月11日	東アジアと西洋列強 (続)
7.	12月18日	貨幣と流通
8.	1月8日	農業
9.	1月15日	工業
10.	1月22日	商取引とその担い手
11.	1月29日	外国貿易の改革
12.	2月5日	東洋の経済競争
13.	2月12日	財政：日清戦争まで
14.	2月19日	現在の財政
15.	2月26日	精神的・習俗的・社会的変容

(出典) 361-6. II 338, 1.

か、国民経済学一般理論と商業政策論の二つの講義が予定されている (ebd.)。

8月6日付ラートゲン宛書簡において、学院側はこれを了承し、講義概要の校正刷を送付している (ebd.)。

気管支炎の発症と入院

ところが、ここで大きな誤算が生じる。暑さのなか、授業準備と引っ越し準備に追われていたラートゲンが、気管支炎のため倒れ、ハイデルベルク大学病院に急遽入院したのである。9月26日付書簡(妻エミー代筆)において、その事情が綴られている。「小職は、治癒に長期間を要する気管支炎のため、ベッドに拘束されており、そのためハンブルク到着はかなり遅れる見込みです。引っ越しの手配を妻に委ねざるをえないのではと危惧しております。商業政策にかんする講義の開始時期を遅らせる必要がなければいいのですが、それでもその可能性を予想しておかなくてはなりません」(ebd.)。ハンブルクの担当官は28日付で返信し、その後様子をみていたが、経過は芳しくなかった (ebd.)。

10月5日付担当官宛書簡において、ラートゲンは、10月中旬にならないと旅行ができず、しかもハンブルクに赴くことができたとしても、一定期間の静養が必要だという医師の診断結果を報告し、そこで商業政策論講義の開始を10月29日としたい旨を願いでる (ebd.)。

しかしこの見込みも大きく修正を余儀なくされる。ラートゲンは、10月26日付市長メッレ宛書簡において、医師クレールからもう少しばかり静養するよう助言されたことを述べ、「それゆえ、来週始めるはずだった私の講義(複数)の開始を、さらに延期せざるをえません」としている (ebd.)。

これを受けて、学院教学部は、11月30日付で、商人のための上級講義「現代の商業政策」の開講を12月3日に設定するとともに、「東アジアにおける国家生活と経済生活」および「国民経済学一般理論からの諸章」は、講師の健康状態を顧慮して、さらにのちに開講される旨を受講希望者に告げる (ebd.)。

ラートゲンは、12月3日から実際に「現代の商業政策」講義を開始したようであり、12月14日付で、この講義の年内の最終講義日が17日であることを確認し、年明けの1月7日に講義を再開することを希望し、また「東アジアにおける国家生活と経済生活」は1月8日に、「国民経済学一般理論からの諸章」はできれば1月2日に開始したいと申しでる (ebd.)。

しかし学院教学部は、1月2日にはまだ授業をおこなわないので、最後の科目の講義を1月9日から始めるよう慫慂し、12月31日付でラートゲンもこれを了承する (ebd.)。

授業計画の大幅な修正と講演「日本人の世界観」

こうして、講義「東アジアにおける国家生活と経済生活」は、その内容の大幅な修正を余儀なくされる。そこでラートゲンは、回数を圧縮しながら、2月で終講するはずだったものを3

月まで延長することにして、講義計画を立てなおす。12月31日付で彼が学院に送付した講義計画修正版は表2の通りである。

表2 東アジアにおける国家生活と経済生活 (縮小版)

回	日付 (予定)	内容
1.	1月8日	東アジアと西洋列強
2.	1月15日	国土と国民
3.	1月22日	国家：過去と現在
4.	1月29日	経済変動
5.	2月5日	貨幣と信用
6.	2月12日	財政
7.	2月19日	財政 (続)
8.	2月26日	外国貿易とその担い手
9.	3月4日	輸入と輸出
10.	3月11日	極東の経済競争

(出典) 361-6. II 338, 1.

二回分の予定だった「東アジアと西洋列強」を一回分にまとめ、「東洋の経済競争」を「極東の経済競争」に変更し、「国民性」「農業」「工業」「精神的・習俗的・社会的変容」を割愛するなど、大幅な削減・圧縮によって、彼は15回予定の講義案を10回になんとかまとめなおしている。そして彼は実際この縮小版を遂行したと思われ、学院の担当官からの電話による問い合わせ (問い合わせ日はおそらく3月11日) にたいして、彼は、この講義を3月11日に終講する予定であると告げている (ebd.)。

この縮小版をみて、とくにわれわれの興味を惹くのは、最終回に予定されていた「精神的・習俗的・社会的変容 (Geistige, sittliche und soziale Wandlungen)」がカットされたことである。これは彼にとって非常に不本意だったと思われる。たまたま (かどうか)、総合福音普及協会の招きを受けたとき、彼は、当初のスケジュール (表1) で2月26日に語る予定だったこの内容を、聖ニコライ教区ホール (St. Nikolai-Gemeindesaal) に場所を変えて、2月21日に語ることにしたのではなからうか。こう考えると、病氣療養による講義メニュー変更とこの公開講演との関連がみえてくる。

公開講演「日本人の世界観」

こうした経緯を経ておこなわれた講演「日本人の世界観」は、彼がハンブルクに着任した当初、ひろく公衆を相手にしておこなった公開講演の記録であり、これはいわばハンブルクにおける《顔見世》講演となった。その内容は、たしかに日本の「精神的・習俗的・社会的変容」に深く関わっている。

また同時に、講演企画開催者への配慮も顕著に認められる。総合福音普及協会は、極東における布教活動に力を入れており、その活動の方向性を、日本人の精神生活の現状を踏まえて展望しており、それは講演の末尾にしめされている。

『ハンブルク情報』紙の記事では、日本人の社会意識の変化によって、天皇の存在すら、国家の第一官職にすぎなくなる可能性が示唆されている。これは、天皇機関説が有力な学説として台頭してきたことを念頭に置いて語られていることが明らかである。天皇機関説のもととなったのはゲオルク・イエリネクの国家学説だとされており、そのイエリネクは、1900年から1907年まで、ハイデルベルク大学におけるラートゲンの同僚であった。しかも、たんに同じ大学にいただけの関係ではなく、法学部の公法学教授であるイエリネクは、ラートゲンとともに、哲学部国家学・官房学部門の運営に直接携わっていたのである。またラートゲン自身も、もともと法学部(法学・国家学部)の出身であり、シュトラースブルク大学ではゾームやラーバントにも師事していた。

『新ハンブルク新聞』紙の記事では、このように旧来の価値秩序が崩壊しつつある現在、宗教と道徳による新たな基礎づけが待望されており、ここに伝道を差しむけるべきことが強調されている。もしもこれを怠ると、新しい日本では英米思想世界が支配的となる可能性が高いので、これを阻止し、日本の国民統合に適合したキリスト的・ドイツ的思想をもたらすことが、伝道の課題だとされている。

彼は、後年総合福音普及協会のために——確認できるかぎり——もう一回講演をおこなっている。その「日中における伝道の意義 (die Bedeutung der Mission in Japan und China)」と題された講演(1912年3月5日)においてもまた、宗教なしには、日本の国民生活は危機に瀕するだろうと論じられ、国民精神の確保のために、仏教と神道とキリスト教とが競いあっていることが強調されている⁽²⁾。ラートゲンにあっては、プロテスタンティズムの注入は、日本の国民統合にとって有効だと考えられているのである。

国民統合の問題について

その国民統合は、現状では、資本主義化によって大きく揺らいでいることを、ラートゲンは強調している。マールブルク時代の1896年10月10日、彼はドレースデンで『近代日本の成立』と題した講演をおこなっていた。そのなかで、西南雄藩の藩士たちと公家勢力とが倒幕に向かっていく状況について、次のように性格づけている。「国民統合意識 (Nationalgefühl) が局地的郷党主義 (Lokalpatriotismus) を乗り越えた。このとき、古い直接的天皇権力すなわち正統的天皇権力のもとへの帝国の統一が、南部の侍たちと、貧窮のなかで、また天皇の周辺できびしい監督のもとに生きていた古い公家たちとの共通の目標になったのである」(Rathgen 1896: 11)。ここにしめされているように、nationalであろうとすることは、ひとつには封建的分権意識を超えた事柄であり、また外的脅威にたいして、日本をひとまとまりにする紐帯を形成する課題でもある。講演「日本人の世界観」のなかでも national という形容詞が何回か用いられており、それは「民俗的」という意味であるケースもあるが、多くはこうした新しい国民性にかかわって用いられているので、ここではおおむね「国民統合的」と訳した。

倒幕時にはこうした国民統合意識が高揚したのだが、資本主義化の進行のなかで、それはいまや弛緩しつつあるというのが、ラートゲンの見立てである。

資本主義論にかんするラートゲンとヴェーバーの知的交渉

資本主義化の進行によって生じる伝統的精神世界の崩壊は、国民統合意識の危機にとどまるものではない。そのことは講演「日本人の世界観」の基調をなしており、古い精神的紐帯が失われ、封建的な模範像が資本主義的なそれに変質していくと、国民感情全般が崩壊に向かうのであり、それは大きな社会不安を招くにちがいない。ここでは新たな国民精神の紐帯ないし価値規範の確立が急務である。というのは、「資本主義的な模範像」と言っても、それは端的には精神の欠落にはかならないからである。

こうした議論は、ハイデルベルク時代の同僚マックス・ヴェーバーの資本主義論と密接な係わりを有している。とりわけ『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』末尾の「精神を欠いた専門人、心情を欠いた享楽人、この無の者は、人間存在のかつて達したことのない段階に登りつめたとうぬぼれる」という文言が、このときラートゲンの脳裏にあることが明らかである (EuG: 154)。

しかし、これをヴェーバーからラートゲンへの一方向的な影響とみなすのは早計である。むしろ、ヴェーバーの著作を読むと、ラートゲンからヴェーバーへの影響を顕著に看取できる。たとえば『近代日本の成立』のなかで、ラートゲンは次のように述べていた。

徳川家の統治下において、「国土の三分の一以上は將軍家の直轄家産であった。270の藩のうち、半分は親藩 (seine Verwandten) と譜代大名 (seine Vasallen) であり、[残り] 半分の藩のみが天皇の直接の封臣 (direkte Lehnsleute des Kaisers) であった。しかし彼ら [外様大名] もまた將軍の監督に完全に服していた」(Rathgen 1896: 6)。しかも、頻繁に繰りかえされる転封によって、藩権力と領地との紐帯がいちじるしく弱まっていく。このことから、その後藩権力が廃絶されるさいの容易さがある程度までは説明できる (ebd.: 6-7)。

この旧秩序を崩壊させた力は、西南の藩権力そのものに由来するのではなく、むしろ、ドイツ中世のミニステリアーレンと同様に大君主の隷属的従士 (Gefolgsleute) から発達した騎士階級 (家臣団) に由来する。もっとも、ドイツの騎士階級とは異なって、彼らの地位は物権化されたものではなく、地方知行はわずかであり、大多数の者は、たんに領主の穀倉から禄米 (Reisrente) を得ているだけで、しかもこの禄の世襲がいつまでも確実であるわけではなかった。したがって、そこでは臣従とレーエン忠誠との人格的な紐帯だけがよく発達した。こうした層は教養ある軍人=官僚層をなし、その「侍層のなかから指導者たちが出現し、この指導者たちのなかから革命の戦士たちが出現した」(ebd.: 7)。

この記述を、ヴェーバーの日本論と重ねてみよう。『ヒンドゥー教と仏教』のなかで、ヴェーバーは次のように論じている (MWGI/20: 434-438)。

〔天皇の〕直臣のなかの筆頭者、つまり将軍(帝の元帥(**Kronmarschall**))〔征夷大將軍〕であり、かつ封臣の頭目でもあり、したがって宮宰である)は、その家門権力圏域〔天領〕の内部では直接のヘルであり〔将軍自身も大名であることを指す〕、また封臣諸侯の行政監督をおこなった。一方で、大名は、地方諸侯として完全な統治権力を賦与され、将軍と同様に、天皇 **Kaiser** 自身の封臣と目されていた。〔他方〕この地方諸侯(将軍を含む)の封臣とミニステリアーレン、すなわちさまざま位階の侍のなかでは、騎乗勤務の騎士が最上位にあった。レーエン階層制においては、なによりも、この両者の間にひとつの断絶が存在していた。徒歩で勤務する家臣(下士 **kasi**)はたんなるミニステリアーレンであり、彼らはしばしば役所勤務に従事した。侍のみが武器所持〔帯刀〕資格をもち、また受封資格をもち、そういうものとして、農民から、また封建的なしかたで農民よりもなお低い位階に置かれていた商人や手工業者から、厳格に区別されていた。彼ら〔騎士身分の侍〕は自由人であった。世襲レーエン(藩 **han**)は、いっぽうでは剥奪することが可能であり〔改易〕、フェロニー〔封建法上の忠誠義務違反〕または重大な失政を理由として、レーエン法廷〔幕閣〕の判決によって没収された。また下級レーエンへの移し替え〔転封(減封)〕もここで処断されえた。このことと、またとりわけ、提供されるべき戦士数の規定のために、伝統的に戦士たちに帰せられた年貢米の高(「石高 **Kokudaka**」)——これはまた年貢米の保有者の位階をも規定した——にしたがってレーエンの査定登録〔蔵入地と給地の配分決定〕が施行されたことによって、日本のレーエンは、とくにインドにみられるような、あの典型的アジア的軍事プフリエンデに接近する。しかしながら、(伝統的な名誉贈与物とならんで)人的誠実義務と従軍義務が決定的なものである。位階を年貢米の高にしたがって定め、しかも誰かを大名に数えいれるべきか否かをも年貢米の高にしたがって決定されるべきだとする見地は、当然にも、原初的な氏姓カリスマ的見地の完全な逆転——この逆転は他のケースでも時には生じていたことであろう——である。原初的な氏姓カリスマ的見地にしたがうと、〔年貢米の高ではなく〕ジッペの伝承位階が、授封されるべき官職位階および伝統的にそれと結びつけられている諸権能にたいする要求権を授けたのである。将軍の官房(幕府 **bakou-hou**, **baku-hu**)は、大名の行政、彼らの政策、また政治的に重要な彼らの私的行為(たとえば〔幕府の〕同意を必要とした大名家の婚姻の締結)を統制し、大名はそのレーエン保有者たちのもろもろの行為を統制した。老齢に達した封臣あるいは判決によって勤務不能と宣告された封臣は、隠退(隠居 **inkyō**, **inkyō**)しなくてはならなかった。後継者は叙任を受けなくてはならず、同じことは「封主死亡復帰(**Herrenfall**)」にも妥当した。レーエンは不可譲であり、期限を限ってのみ収益質として抵当に入れることができたにすぎない。〔中略〕封臣とミニステリアーレンとの下層階級——侍と下士 **kasi**——が日本にとって典型的な層をなしていた。緊張度の高い——つまり純封建的な——名誉観念と封臣の誠実とが中核的な感情をなしていて、いっさいは——すくなくとも書物に書かれた理論においては——結局は

この中核的感情を軸として動いていた。実生活においては、禄米がこれらの階級の物質的給養の典型的な形式であった。〔中略〕重要な要件にさいして、各主君は封臣総会を召集した。かかる侍の集会こそが、割拠する藩 (Teilfürstentum) のいくつかにおいて、前世紀60年代の大危機のなかで、軍の近代的形態への移行を決定したものであり、幕藩制 (Shogunate) の転覆へといたったあの政策への方向をそもそも決定したものである。〔王政〕復古のその後の推移は、やがて——たんに軍のみならず、国家公務においても——レーエン制的行政に代えて官僚制的行政の導入へといたり、またレーエン権の解体へといたった。このレーエン権の解体は、侍階級の広範な層を小レンテ生活者的中産身分に変化させ、また部分的にはすっかり無産者に変化させた。旧い封建時代の高い名誉概念は、禄米プフリエンデ制の影響のもとで、すでに前もってレンテ生活者気質の方向へとやわらげられていた。しかしながら、ここから出て、市民的営利の倫理へのなんらかの移行を自力でなしとげることはできなかった。

二つの文献を読む者は、幕末維新の変革・変動過程にかんするラートゲンの認識が、直接ヴェーバーのそれを基礎づけていることに気づくはずである。ここにわれわれがみているのは、ラートゲンの1896年の日本分析が、ヴェーバーの1916/17年の日本論に——とりわけ後発資本主義論に——重要な手がかりを与え、またヴェーバーの1904/05年の資本主義論を読んだラートゲンが、1908年の講演「日本人の世界観」においてヴェーバーの立論を応用したという相互作用なのである。両者は7年間ハイデルベルク大学で同僚だったので、その間に、こうした問題にかんしてさまざまな議論が直接交わされたのであろう。

日本における資本主義の発達にかんして、それがどのような精神的基盤においてもたらされたものなのかという問題意識からの論究は数多いが、資本主義の発達・浸透にともなって、日本人の精神世界にどのような変容が生じたのかという論点は、従来かならずしも踏みこんだ研究がなされていなかったと思われる。ラートゲンの問題関心は、むしろ後者にあることが、この講演から看取できる。

すでにドイツにおいて、資本主義の浸透によってさまざまな労働問題・社会問題・都市問題等が生じ、それがドイツ社会を不安定化させており、これを有効に打開する途を提示することが、とくにシュモラーらにとって重要な課題だと認識されている。しかも、社会の安定化にとって、伝統社会が有していたような物心両面の社会的紐帯が有効だと考えられるが、資本主義化は、そうした紐帯を根こそぎにするという事態を不可避にともなっている。その意味では、資本主義化は二重の問題を抱えこんでいることになる。ラートゲンが日本の経済発展と社会変容とを観察したとき、まさにその二重の問題状況がみえてきたのである。

ラートゲンの交友関係

ラートゲンの日本資本主義理解は、日本時代におけるフェスカとのディスカッション(注1参照)によって練られ鍛えられるとともに、後年ヴェーバーやゴートハインとの交友のなかで磨きあげられていったものである。現在までに判明している事実関係を記しておく、ラートゲンとヴェーバーとが知りあったのは1892~93年頃である。『日本の国民経済と国家財政』によって教授資格を取得したラートゲンは、1892年夏学期に、ベルリン大学哲学部で講義活動を開始している。『ローマ農業史』によって教授資格を取得したヴェーバーは、同じ学期に、同じ大学の法学部で講義活動を開始している。

この頃両者間にコンタクトがあったかどうかはまだ確認できていないが、翌年ベルリンで開催された講座に、両者とも講師として招かれている⁽³⁾。招いたのはフリードリヒ・ナウマンである。もしもこのベルリン講座がラートゲンとヴェーバーとの邂逅の場であったとすると、二人はナウマンの仲介によって引きあわせられたことになる。

ナウマンとヴェーバーとの関係はよく知られており、その関係は、1919年のナウマンの死にいたるまで緊密なものとして持続した。とくに1896年10月15日付ハウスラート宛書簡は重要であり、これは、ヴェーバーとナウマンとの関係が切ろうとしても切ることのできないものであることを如実にしめしている⁽⁴⁾。

ナウマンは、ラートゲンとも後年まで交友関係を保ちつづけた。ラートゲンは、ナウマンが編集する雑誌『キリスト教世界』に寄稿している(Rathgen 1900)。また1918年9月25日付で書簡を送っており、ナウマンも同年12月20日付で書簡をラートゲンに送っている(NI F. Naumann: N 3001/12, Fiche 3)。ほかにも書簡往復があったのではないと思われるが、いまのところ発見されていない。ヴェーバーとラートゲンとナウマンとの関係を整理しなおして、ドイツ政治史上に位置づける必要があるかもしれない。

さて、遅くとも1893年までに知りあうことになったヴェーバーとラートゲンは、1900年から1907年までハイデルベルク大学の同僚であった。ハイデルベルク大学への招聘が決まったとき、ラートゲンは、1900年3月27日付でバーデン政府高官に宛てた書簡中で次のように書いている。「近いうちにマックス・ヴェーバーがすっかり回復し、その教育活動を再開するであろうことを私が切に希望していることにご留意くだされば幸いです。ヴェーバーのような高く評価する同僚とともに働くことができるなら、じつに好ましいことですし、〔ヴェーバーと受講生を分けあうため〕受講料の減少が予想されるとしても、それはそれで好ましく感じます」(GLA 235/3140: 108 f.)。

しかし二人の関係はかならずしも単純でなく、またかならずしも良好でなかった。このことはすでに詳細に究明したので繰り返ささない(野崎敏郎 2011: 168-171, 194-196, 212-222)。

ハイデルベルク大学経済学第一正教授であるヴェーバーは、1900年に病疾のため休暇に入

り、その任を、新設された第二正教授ポストの初代教授であるラートゲンに譲るが、結局ヴェーバーは健康を回復するにいたらなかったので、1903年秋に正教授を退いて正嘱託教授に配置替えされ、翌1904年に、ヴェーバーの後任としてエーベルハルト・ゴートハイน์が着任する(前掲書:207-225)。

ゴートハイน์の立論とヴェーバーの資本主義論との関連についてはすでに指摘されており(牧野雅彦2006:109)、また1904年から1907年にいたるまで、ラートゲンがハイデルベルクでもっとも親しく交わっていたのはゴートハイน์であった⁽⁵⁾。ゴートハイน์が着任する1904年からラートゲンが離脱する1907年までの三年間、ヴェーバー(正嘱託教授)は、アメリカ旅行を経て『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』を書きあげ、ほかにエドゥアルト・マイヤー批判、『教会』と『教派』、日露戦争後のロシア情勢分析、シュタムラー批判等を公にする。ラートゲン(経済学第二正教授)は、ヴェーバーのロシア分析とある意味では対をなす日本にかんする分析・考証を展開する。そしてゴートハイน์(経済学第一正教授)は、経済学領域と歴史学領域の講義を担当するとともに、バーデンの歴史にかんする研究にも着手する。ハイデルベルク大学哲学部の三人の教授たちは、この時期に、たがいに刺激を与えつつ研鑽を積んでいたのである。

1907~08年のラートゲン

これらの事実関係を踏まえて考えると、1907年から1908年にかけてのラートゲンは、第一に、マールブルク時代からハイデルベルク時代に練りあげた日本研究の一応のまとめを図っていたと思われる。また第二に、ハンブルク拓殖研究院における新しい教育任務を念頭に置いて、ドイツが諸外国との関係を構築しようとするさいに、相手国の社会経済状況を、また歴史的背景と文化状況をどのように考慮に入れるべきか、相手国にたいしてどのようにアプローチすべきかを思案していたことも窺える。さらに第三に、講演末尾に示められている総合福音普及協会への期待表明からわかるように、独日文化交流のありかたを、両国が共通して抱える文化問題・国民統合問題と関連づける新しい視座が立てられていることも興味深い。

このように、日本社会そのものへの関心とともに、日本社会分析をドイツの植民政策ないし外交政策に、さらには文化交流の刷新に結びつけようとする課題意識が顕著にみられるのが、以下に紹介する講演録である。

資料I 『ハンブルク情報』(1908年2月22日付)

日本人の世界観

【教会便り⁽⁶⁾】昨日、総合福音普及協会の招きで、博士カール・ラートゲン教授が、聖ニコライ教区ホールにおいて、標記の論題について講演をおこなった。講演者は、日本の国情と国民

を、自身の観察によって知っており、大要次のように論述した。現代日本人は非常に高い教養水準にあるので、—— 一見すると——日本人にたいしてキリスト教の説教が提供できるものはなにもない[ようにみえる]。日本人にあっては、宗教を奉じていることは高貴なこととはされていない。しかしそれにもかかわらず、たとえばドイツにおいて自分の無宗教性を自慢しているどの日本人も、日本からの出立前には、まず祖先の墓前に祈りを捧げたのであり、彼が再び帰郷したさいには同じことをするだろう。たとえ現代日本人がみずからすすんで宗教性をしめさないとしても、日本国内では、やはりいたるところで宗教的行動をみかけるのである。村や都市において灰色の屋根が並ぶなかで、あらゆる様式の寺院の屋根や僧院建築や教会の建物が[その上方に]突きでている。すべての道のうえには、通行者を守る仏像が建っている。カトリックの地方においてみられるように、そこここで霊場参詣者や敬虔な巡礼者をみかける。少女の使い古された人形は、投棄されるなどということはなく、仏像の安置された寺院に保管され、小さく噛みくだかれた紙団子を添えられ、信者の祈祷によって奉納される。仏僧は約十万人に上り、教区によって維持されている。檀家農民の自発的な寄進と無償労働とによって、壮麗な寺院が絶えることなく出現している。そしてそのさい、十分に敬虔なしきたりの全生命は、慣例ということからは説明がつかないのであって、それは精神生活の証なのである。

日本人の宗教的想念は、非常にさまざまな宗教と中国哲学の影響を受けており、またそれらが混じりあったものである。古い土着宗教は神道であり、これは祖先崇拜、つまり死者にたいする敬愛に満ちた崇拜であり、死霊にたいする畏敬に由来している。最初は家の祭式であったが、これを超えて村の祭式になった。家の祭式は毎日執りおこなわれる。家系譜を前にして、短い祈りが捧げられる。「昼も夜もお助けがありますように、先祖様に謹んで感謝を」。神道の神社では、村の守護神にたいして、たとえば農民の仕事にとって具合のいい天候のために祈りが捧げられている。しかし、祖霊や村の神や大きな地域の神といった一群の神々のうえに、天皇の祖先である天照大神が聳えたっている。天皇は、その先祖にたいして、国民のために祈りを捧げるが、天皇自身が現人神でもある。本来神道は、ひとつの教義をなすものではなく、むしろその内容物は天皇への忠誠と祖先崇拜である。

日本人にはじめてひとつの教義をもたらしたのは仏教であった。仏教によってはじめて、日本人は信仰の緊密性と道德体系とを授かったのである。しかしじきに仏教は民俗的な色彩を加えられ、神道の神々が仏教と融合された。もはや、死者にたいして祈られるのではなく死者のために祈りが捧げられている。それに加えて中国の儒教が入ってきた。

ところが、十八世紀⁽⁷⁾に、あらゆる外国勢力に敵対し、[のちに]祖国宗教を自称するようになる運動が広範に展開された。この運動は、純粹神道の再生を希求し、国家の完全な変革と天皇権力の復古(1868年)へといたった。しかし今日、この運動の凋落が認められる。近代的なものによって、古いしきたりはなにもかも揺らいでいる。たとえば家父長的な警察権力は、もしも旅行中のイギリス人女性がみたら鼻に皺を寄せて顔をしかめるような礼拝所への出

入りを禁止している。徹底的なのは自然科学的な啓蒙である。初等学校と教科書は素朴な民俗信仰の破壊者である⁽⁸⁾。いたるところに不確実性の感情が広がっている。古来の状態は揺らいでおり、〔その一方〕新たなものがどんなものになるのかは誰も知らない。わかっているのは、新たなものは国民統合的なものでなくてはならず、また科学の検証に堪えられなくてはならないということである。キリスト教がここに導入されるとすれば、それはいちじるしく国民統合的な色彩を帯びることであろう。またそれゆえ日本では、カトリックは、最底辺の国民層以外ではけっしてなんらかの役割を果たすことはないだろう。なぜなら、カトリックは国民統合的たりえないからである。

外国文献を通じて、再三にわたってキリスト教思想が日本人のあいだに持ちこまれており、キリスト教についてなにも知らうと欲しない日本人においてもそうであった。外国思想によって、家族の統一性、天皇家の統一性、国家の統一性、祭式の統一性は緩められている。天皇が、もはや神ではなく、国家の第一官職であるような時代はさほど遠くない。今日すでに、英米思想世界が日本人の生活を支配している。ドイツもまた、来たるべき新たなものへの影響力を確保し、ドイツ精神の特色が、この新たなものの中に息づくことを望むものである。

(Zweite Beilage zu Nr. 135 der *Hamburger Nachrichten* vom 22. Februar 1908, Abend-Ausgabe.)

資料Ⅱ 『新ハンブルク新聞』(1908年3月2日付)

都市とその近郊

ハンブルク⁽⁹⁾

日本人の世界観

新たに就任したハンブルクの国民経済学教授カール・ラートゲン博士が、総合福音普及協会において、日本人の世界観について語った。ラートゲンは、東京の帝国大学で5年間⁽¹⁰⁾教授として教鞭を執っていたので、現代日本にかんするもっとも正確な識見をもつ人のひとりであり、短期間のうちにヨーロッパの文化国家の国民から羨望の混ざった敬意を獲得するにいたったことで知られているこの国にかんする彼の詳論は、じつに大きな興味を惹くものだった。

現代の唯物論者が無神論者によって、日本はしばしば引き合いに出され、ひとつの国民が宗教なしでうまくやっていくことができる証人とされており、日本人の無宗教性は、ロシアとの戦争にさいして、勇猛さ・愛国心・自己犠牲といった輝かしい特質を実証することを妨げなかったとされている。ヨーロッパに住んでいる日本の若者もまた、日本では特定の宗教は支配していないと確証している。しかしこうした見解にとって不都合な事実がある。日本を訪れた者が目にするもっとも著名な建造物は寺院や仏僧院であり、そこには信者たちが文字通り流れをなして行き来しているのである。平野部では、贖罪者あるいは巡礼行進に出くわし、また寺院

の前方部ではしばしば絵馬をみかけ、これはカトリック教会の奉納額と顕著な類似をしめしている。無宗教と称せられているのに反して、実際には、総計十万人以上に上る仏僧は、1870年に生じた寺院財産の国有化以降、自由意思による寄進によって維持されている。ヨーロッパに聖人像があるのと同様に、田舎道には多数の仏像が建っている。もっとも大きな役割を担っているのは祖先崇拜である。全国民は、その死んだ祖霊とともに生きており、最高の敬意を払われるのは天皇の祖先である。日本人の思考過程と内的世界とを跡づけることは、ヨーロッパ人にとって非常にむずかしいことである。彼らのなかでは、さまざまな宗教が混在しており、古い神道信仰と仏教は、中国哲学や太古の自然神神話と混然となっている。

日本の状態は、アウグストゥス時代までの古代ローマの状態ときわめてよく似ている。どちらにおいても、太古の家神と都市神が支配的で、ローマにおいては、ギリシャのオリポスの神々が入りこみ、同様に日本においては、中国仏教と中国哲学が入りこんでいる。

日本の祖先崇拜は、元来死霊畏敬に根ざしているのだが、非常に早い時期に、祖先への敬愛の念へと転化し、いまでは、全生活を支配し、日本人全員の行動をもっとも強く律するものになった。祖先崇拜から、自分は祖先にとってふさわしい者だと証を立てる義務が生じている。この祖先崇拜によって、家族はしっかりとまとめあげられ、家長は無制限の権力を保持しているが、家族全員にたいして無制限の責任を負ってもいる。祖先崇拜全般を超えて、天皇の祖先へ、つまり太陽への崇拜が抜きでいる。天皇は、彼の国民のために祖先に祈る。しかし彼自身は国民にとって神である。それゆえわれわれは、国家宗教に比定されている神道のうちに、完全な皇帝教皇主義の事例をみるのである。日本において、王朝が一度も交替しなかったという事実は、かかる祖先崇拜と関連している。

神道信仰は、ひとつの崇拜にすぎず、なんら教義でなく、その神官は、なんら司牧でなく、祭官であり、優れた教義を有する仏教とはまったくの別物である。仏教は、のちに神道と混淆し、さらにのちに儒教および儒教哲学と混淆した。加えて、かかるすべての構成要素から、——もしもそう言いたければ——天皇の姿に体现される祖国宗教が発生したのである。

しかし、ヨーロッパの文化形態にたいする日本の驚くほど急速な適応によって、このまったく古めかしい信仰が揺らぎはじめている。ヨーロッパと同様、日本においても、初等学校と教科書は素朴な民俗信仰の破壊者になった⁽⁸⁾。封建的な模範像は資本主義的なそれに変質した。新しい政治思想が影響をもって、固陋な家従属論にたいして、現代の選挙権や法の下での全般的平等や個人の尊重が調和するであろうかという疑問を呈している。

日本では、国民感情全般が崩壊途上にあると広範に認識されており、宗教と道徳による新たな基礎づけが待望されている。〔したがって〕ここに伝道を差しむけることができる。到来するはずの、また無条件に日本国民を統合するはずの新宗教に、キリスト的・ドイツ的思想を十分に混入させ、これをもって、新生日本が英米思想世界に支配される新段階に至らないようにすることが、〔総合福音普及協会の〕伝道の課題になるであろう。

(Zweite Beilage zu Nr. 104 der *Neuen Hamburger Zeitung* vom 2. März 1908.)

〔注〕

- (1) 1891年11月4日付兄宛書簡によると、「細部にわたってかならずしも彼と見解を同じくしていないにもかかわらず、『日本の国民経済と国家財政』にたいして、フェスカが「大きな『喜び』を表明してくれたことが、私には格別にうれしかった」という (NI B. Rathgen: Karton Nr. 3)。このことから、この大著の執筆に先立って、ラートゲンとフェスカとのあいだでかなり立ちいったディスカッションがおこなわれていたことがわかる。
- (2) *Die Mission in Ostasien. Hamburger Fremdenblatt*, den 7. März 1912.
- (3) このとき、ヴェーバーは「農業と農業政策」(8回)を、ラートゲンは「商業」(4回)を担当しており、講義レジュメ集が遺されている (*Grundriß zu den Vorlesungen im Evangelisch-Sozialen Kursus zu Berlin, Oktober 1893*. Berlin: Druck der Vaterländischen Verlags-Anstalt)。
- (4) この書簡は、ヴォルフガング・モムゼンによって紹介され、ひろく知られているが、書簡の現物を確認したところ、モムゼンによる重大な改竄があることが判明した。また既存の邦訳はひどく誤っていて、ヴェーバーの真意を伝えていない。原典からの正確な翻訳と解釈はすでにしめておいた (野崎敏郎 2011: 69, 344 f.)。
- (5) バルトルト・C・ヴィツェへの聴き取りによる。なお、ヴィツェの講演録「学者、自由主義的愛国者、世界市民」(Witte 2009: 9) および拙著 (野崎敏郎 2011: 224 f.) を参照。
- (6) 記事の冒頭に „K-z.“ と記されている。これは „Kirchenzeitung“ の略号であろう。紙上に教会関連の記事を掲載するさい、この略号を付すものと思われる。
- (7) ラートゲンは、すでに 1896年の講演『近代日本の成立』において次のように論じていた。幕藩制下で、将軍は骨抜きにされ、実権は代理人たる重臣たちの手中に収まる。その重臣たちもまた配下の者たちに政事を委ねる。このことは各藩においても同様で、すべての行政は中間の官僚層の手中に落ち、しかもその中間官僚層のなかに不満が鬱積していく (Rathgen 1896: 8)。そして変革への理論的基礎づけは、将軍家の正統主義的理念の偏向 (後期水戸学) から与えられた。こうして、「幕府にとってますます危険になるにちがいない内的熟成が始まった」(ebd.: 9)。開港によって、一方では、幕府支配の権威が根底から揺り動かされ、他方では、経済状況が激変し、生活物資の高騰を招いた。それは俸禄生活者たる武士層の困窮を一層深刻化したので、彼らの憎悪はまず外国人に向けられた。しかしそれはやがて、むしろ有効な対策を講ずることのできない優柔不断な幕藩権力のほうに矛先を向けていったのである (ebd.: 10)。このように、後期水戸学から派生した思想が、やがて尊王論へと合流し、倒幕の理論的支柱の一翼を担うのであり、ラートゲンは、そうした潮流の胎動期を十八世紀 (の末頃) とみている。
- (8) このことは、『日本人の国家と文化』においても指摘されている。「初等学校は天の神性を剥奪し、警察は古い慣習を破壊し、[資本主義的]競争は昔からのしきたりを崩壊させた」(Rathgen 1907: 138)。このなかの「神性を剥奪する (entgöttern)」という動詞は、ヴェーバーの「呪力剥奪 (entzaubern, Entzauberung)」概念と同じ意味で用いられている。
- (9) 「ハンブルク」欄の冒頭にラートゲン講演記事が掲載されている。「ハンブルク」の後ろには、アルトナと他の近郊地域の欄が設けられている。
- (10) これは誤りで、東京大学・帝国大学を通じての在職年数なら8年間、帝国大学における在職年数なら4年間である。

〔未公開史料〕

361-6. II 338, 1: 361-6 Hochschulwesen. Dozenten- und Personalakten. II 338. Vorlesungswesen. Akten betreffend die Vorlesungen des Herrn Professor Dr. Rathgen. Heft 1 zur Dozentenakte

- R 25. betr. Prof. Dr. Rathgen. Oberschulbehörde, Sektion für die Wissenschaftlichen Anstalten. Vorlesungswesen. Winter 1907/08. Akte betreffend Vorlesung des Herrn Professors Dr. Rathgen. Staatsarchiv Hamburg
- 361-6. I 5 Becker : 361-6. Hochschulwesen. Dozenten- u. Personalakten I 5. Oberschulbehörde, Sektion für die Wissenschaftlichen Anstalten. Personalakten des Professors Dr. Carl Heinrich Becker (1908-1933). Staatsarchiv Hamburg
- GLA 235/3140 : Ministerium des Kultus und Unterrichts. Universität Heidelberg. Dienst. Die Lehrkanzel der Staatswirtschaft, Finanz- und Polizeiwissenschaft, und die Besetzung der Bestellung. Nationalökonomie. 1821-1930. Teil 1. Generallandesarchiv Karlsruhe
- Nl B. Rathgen : Best. 340, Nachlaß Bernhard Rathgen. Hessisches Staatsarchiv Marburg
- Nl F. Naumann : Nachlaß Friedrich Naumann. [Mikrofiche] Bundesarchiv Berlin

[文献]

- AVH : *Anzeige der Vorlesungen der Grossh. Badischen Ruprecht-Karls-Universität zu Heidelberg*. Heidelberg : J. Hörning
- EuG : Weber, M., *Die protestantische Ethik und der »Geist« des Kapitalismus ; Textausgabe auf der Grundlage der ersten Fassung von 1904/05 mit einem Verzeichnis der wichtigsten Zusätze und Veränderungen aus der zweiten Fassung von 1920*, herausgegeben und eingeleitet von K. Lichtblau und J. Weiß. Bodenheim : Athenäum Hain Hanstein, 1993. 梶山力訳, 安藤英治編 1994 『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の《精神》』 未来社
- Melle, W. v. 1923-24 : *Dreißig Jahre Hamburger Wissenschaft 1891-1921 ; Rückblicke und persönliche Erinnerungen*. 2 Bände. Hamburg : Broschek
- MWGI/20 : *Max Weber Gesamtausgabe, Abt. 1. Bd. 20. Die Wirtschaftsethik der Weltreligionen ; Hinduismus und Buddhismus ; 1916-1920*. Tübingen : J. C. B. Mohr (Paul Siebeck), 1996. 古在由重訳 2009 『ヒンドゥー教と仏教』 大月書店
- Rathgen, K. 1896 : *Die Entstehung des modernen Japan*. Dresden : Zahn & Jaensch
- Rathgen, K. 1900 : England und die indische Hungersnot. *Christliche Welt*, 14. Jahrg., Nr. 39
- Rathgen, K. 1907 : *Staat und Kultur der Japaner*. Bielefeld und Leipzig : Velhagen & Klasing
- Witte, B. C. 2009 : Wissenschaftler, liberaler Patriot, Weltbürger ; zum Gedanken an Professor Dr. Karl Rathgen (1856-1921) zu seinem 150. Geburtstag. *Karl Rathgen (1856-1921) ; Nationalökonom und Gründungsrektor der Universität Hamburg. Reden, gehalten beim Akademischen Festakt zum 150. Geburtstag, 24. Januar 2007, 16-18 Uhr, Hörsaal C Universitätshauptgebäude*. Hamburg : Universität Hamburg, 2009
- 野崎敏郎 2011 『大学人ヴェーバーの軌跡——闘う社会学者——』 晃洋書房
- 牧野雅彦 2006 『マックス・ウェーバー入門』 平凡社

[付記]

本稿は、平成 23 年度佛教大学特別研究費による個人研究の成果の一部である。

(のざき としろう 公共政策学科)
2012 年 10 月 10 日受理